台大日本語文研究第 20 期
2010 年 12 月，頁 17-36
2010-10-12 收稿，2011-1-21 通過刊登

王昶雄〈奔流〉論
—與周金波〈志願兵〉的比較—

橫路啓子*

摘要

本論將以王昶雄的短篇小說〈奔流〉(1943)作爲研究對象，與周金波的〈志願兵〉(1941)進行比較研究，探究其主題、獨特性以及在台灣文學系譜中的定位。這兩篇小說在台灣文學研究的脈絡中，多半被論述到是否爲皇民文學的問題，然而本論的問題意識並不在此議題上。筆者將藉由分析文本的結構，探討作者的意圖以及作品的定位等課題。

經分析文本後可得知，〈奔流〉與早其兩年發表的〈志願兵〉在題材、人物設定、故事情節上多有雷同之處。因此，筆者認爲可將〈奔流〉視爲是〈志願兵〉的 Pastiche。然而，〈志願兵〉與〈奔流〉在創作上存在著兩年的時間差距，其中的差異不小。同時，〈奔流〉的主題是，身爲日本帝國臣民的台灣人該如何思考台灣或台灣人的定位，這與〈志願兵〉的主要議題恰好呈現出完全相反的問題意識。

關鍵詞：王昶雄、〈奔流〉、周金波、〈志願兵〉、皇民文學

* 輔仁大學日本語文學系助理教授

A Study of WANG Chang-xiong's Work HONRYU —a comparison with ZHOU Jin-po's work SIGANHEI—

Yokoji, Keiko*

Abstract

This paper researches WANG Chang-xiong (王昶雄)'s short novel HONRYU (奔流), comparing it with ZHOU Jin-po (周金波)'s work SHIGANEI (志願兵). The main purpose of this paper is to clarify the main theme, originality, and the position of the main text in the context of Taiwanese literature in the period of Japanese colonization. In the history of Taiwanese literature, these two works raised the question of whether is imperial subject literature (皇民文學) or not. But the main focus of this paper is not on this question.

From text analysis, we can find the motif, relationship between three characters, and the story of HONRYU is very similar to the story in SIGANHEI. So I think that HONRYU is in pastiche of SHIGANHEI which was published 2 years earlier. But, a gap of two years exits between the two novels, so naturally there is apparent difference in the two works. The main theme of HONRYU is 'in the Japanese Empire, and the question of how the Taiwanese think of themselves as a nation '. This theme is just on the opposite side of SIGANHEI's main theme—how Taiwanese behave as Japanese.

Keywords: WANG Chang-xiong, *HONRYU*, ZHOU Jin-po, *SHIGANHEI*, imperial subject literature (KOMIN BUNGAKU)

* Assistant Professor of the Department of Japanese Literature, Fu Jen Catholic University

王昶雄「奔流」論
―周金波「志願兵」との比較から―

横路啓子*

要旨

本稿は、王昶雄の短編「奔流」(1943) を対象テクストとし、周金波の作品「志願兵」(1941) と比較することで、その主題や独自性、系譜の中での位置付けを明らかにすることを目的としている。この二つの作品は、台湾文学研究においてはいずれも皇民文学であるか否かという問題意識から論じられることが多いが、本稿の問題意識はそれではなく、テクストの構造から作者の意図、作品の位置づけを考察することである。

テクスト分析からわかるのは、「奔流」がその 2 年前に発表された「志願兵」とモチーフ、人物設定、ストーリーなど非常に類似した作品であるということである。このため、筆者は「奔流」を「志願兵」のパスティーシュであると考えている。しかし、「志願兵」と「奔流」には 2 年間という時間差があり、差異も大きい。1941 年の台湾という時空において書かれた「志願兵」とは異なり、1943 年に発表された「奔流」の主なテーマは、日本帝国の中の台湾人として、台湾あるいは台湾人であることをどうとらえるべきかという問題なのである。

キーワード：王昶雄、「奔流」、周金波、「志願兵」、皇民文学

* 輔仁大学日本語文学科助理教授

王昶雄「奔流」論
―周金波「志願兵」との比較から―

横路啓子

一、はじめに

1943 年 7 月、陳火泉の「道」が『文芸台湾』に発表されたことで、時局から求められていた「皇民文学」が具現する。これとほぼ同時期に『文芸台湾』と対立する位置付けにあった『台湾文学』(3-2、1943 年 7 月 31 日) に掲載されたのが王昶雄の「奔流」である。だが作者王昶雄自身が当時を回顧した文章によると、王昶雄はこの時期の当局からの干渉について、「やりたい放題以外のなにものでもなく、作品掲載が許可された後も内容に手が加えられていることに気付き愕然とした」と述べており[1]、当時発表されたテクストは当局によって手が加えられたものであるとしている。また戦後、台湾では 1979 年に遠景出版から「奔流」の中国語訳が出され研究が進められるようになり、これによってこの作品の主題についてさまざまな意見が噴出することになる[2]。とは言っても、その多くが皇民化運動を描いた台湾人による文学作品が例外なく突き付けられる問題――皇民文学であるか否かをめぐってなされている。「奔流」は、発表されてまもなく周金波によって皇民文学の一つだと指摘されており[3]、戦後も台湾の複雑な省籍問題や国際的な状況によって皇民文学か否かという議論にさらされてきた[4]。

---

1 王昶雄「老兵過河記」『王昶雄全集』台北:台北県政府文化局、2002 年、PP.37-48。

2 『光復前台湾文学全集』台北:遠景出版、1979 年 7 月。翻訳者は林鍾隆で、解説では張恒豪が「この作品は深みを持った反皇民化の作品である」と述べている。なお、台湾、日本での皇民文学をめぐる戦後の論争については、賴婉玲『皇民文學論爭研究』(国立中央大学中国文学研究所修士論文、2007 年) を参照されたい。

3 周金波「皇民文学の樹立」初出『文学報国』3 (1943 年 9 月 10 日)、中島利郎・黄英哲編『周金波日本語作品集』(東京:緑蔭書房、1998 年 4 月) PP.211-212。但し、周金波の「皇民文学」観が、在台内地人の考えるものと違っていることは注意すべき点である。

4 張恒豪はこの作品を反皇民化作品として読んだが、中国の包恒新は 1988 年 3

こうした経緯のため、「奔流」というテクストには三つのバージョンがある。一つ目は 1943 年 7 月『台湾文学』に掲載された日本語のバージョン、二つ目は 1979 年に遠景出版から出された『光復前台湾文学全集』に収められた中国語のバージョン、そして三つ目は 1991 年に前衛出版から出版された『台湾作家全集』に収められた中国語のバージョンである。1979 年と 1991 年の中国語のバージョンの最も大きな違いは、1979 年版が初出の日本語を原文として忠実に翻訳したものであるのに対し、1991 年版は 1979 年版を参考にしつつも作者である王昶雄が大幅に手を加え、「争議を引き起こしやすい言葉、段落」[5]などが書き換えられている点である。こうした書き換えについて、作者王昶雄自身は、発表時の植民地政府の検閲による改作に対する一種の「修正」であるとしている[6]。

この三つのテクスト間の差異もまた興味深い問題ではあるのだが、本論の問題意識は、皇民化運動が展開される中で出現した文学作品における作者の意識や意図を探ることである。このため、本稿では「奔流」のテクストとして、1943 年に発表された日本語のテクスト——1943 年 7 月に『台湾文学』に掲載されたものを対象テクストとして用いることをまず断っておかなければならない[7]。

月に『台湾現代文学簡述』で「皇民化に妥協した日本よりの作品」だと指摘している。皇民文学をめぐる戦後の論争については、賴婉玲（2007）『皇民文学論争研究』（国立中央大学中国文学研究所修士論文）を参照した。

[5] 呂興昌〈文章千古事，得失寸心知—評王昶雄〈奔流〉的校訂本〉《國文天地》7 卷 5 期、1991 年 10 月、P.18

[6] なお、王昶雄は戦後、「老兵過河記」で掲載までの紆余曲折、当局による改作をこう記している。「在日帝的高壓政策下，我們的創作有許多禁忌，因而有諸多問題不能深入去探討。(略)當時，這篇稿子經過一波三折，總算產生了。送審一個星期之後，好不容易才批准「刊出 OK」了。起初我不禁欣喜，是一種高山流水獲知音的欣悅，繼而重讀自己的苦心之作，才發現有不少地方莫明其妙的慘遭修改。修改是指有些地方被刪去，有些地方被補充之意。例如：林柏年每每脫口而出的「日人『六成加棒』的特惠條例，真正豈有此理！」、「二腳（人，指台人）窮，四腳（狗，指日人）闊！」等的口頭語，毫不姑息的通通被刪掉。或者在小說已近尾聲的一段，柏年曾從東瀛寫給「我」的一封信件裡，發現有好多補充文字，如「我感悟到，要和宏大的大和魂相聯繫，非默默地用我們的血潮描繪不可！」等語。」、『王昶雄全集』台北：台北県政府文化局、2002 年 P.45。

[7] 本稿では、「奔流」のテクストとして『台湾文学』3-2（1943 年 7 月 31 日）の復刻版（『五十種期刊 29 新文学雑誌叢刊』台北：東方文化書局、1981 年 3 月）を使用する。以下、引用部分にはこのテクストのページ数を括弧で記す。

先行研究では、「奔流」は皇民文学であるか否かという点から論じられている他に、太平洋戦争期の台湾知識人の内面を語る作品としても読まれている[8]。だが、本稿が注目するのは、「奔流」における各主要登場人物の皇民化に対する態度の違いや、台湾知識人たちの葛藤、揺らぎではないし、ましてやこの作品が皇民文学であるか否かといったイデオロギー的な問題でもない。ここで論じるのは、皇民化運動をモチーフとして表現した作品の系譜における「奔流」という作品の位置付けである。本稿では、「奔流」に先立って発表された「志願兵」と比較することで、「奔流」の主題やその独自性、系譜の中での位置づけを明かにしていきたいと考えている。

二、「志願兵」のパスティーシュとしての「奔流」

「奔流」そのものを論じる前に、なぜ比較するテクストとして周金波の「志願兵」を選んだのかを述べておきたい。周金波の「志願兵」は、『文芸台湾』2-6（1941 年 9 月 20 日）に発表された作品であり、「志願兵」も「奔流」も皇民化運動での本島人のアイデンティティというモチーフを扱っている。この二作がいずれも皇民文学をめぐる議論の中で必ずと言っていいほど扱われるのも、そうしたモチーフによるものであろう。しかし、筆者がそれ以上に注目するのが、この二つの物語の構造の類似性である。

まず先に発表された「志願兵」について述べたい。この作品は 1941 年 9 月に『文芸台湾』に発表された小説であり[9]、作者である周金波は、「志願兵」と、その一つ前の作品「水癌」によって、台湾での皇民化運動を文学作品に取り入れた初の本島人作家となったと言って

---

[8] 張恆豪〈三讀「奔流」〉（《文訊雜誌》40、1989 年 2 月、PP.109-111）では、この作品を皇民化運動での異文化衝撃によって、日本中心主義世界観と中国中心主義世界観の間で揺れる台湾知識人の苦悩を描いたものだとしている。また尹東燦「王昶雄「奔流」論」（『藝文攷』8 号（2003 年）、PP.19-44）では、異文化の衝撃、都会／田舎、中央／地方といった視点から、三人の人物の皇民化について論じている。

[9] 本稿では、「志願兵」のテクストとして『文芸台湾』12（1941 年 9 月 20 日）の復刻版（『五十種期刊 29 新文学雜誌叢刊』台北：東方文化書局、1981 年 3 月）を使用する。以下、引用部分にはこのテクストのページ数を括弧で記す。

よい。そしてこれらの作品によって、周は1942年に「文芸台湾賞」を受賞、台湾を代表する本島人作家として担ぎ上げられることになる。しかし周囲のそうした扱いをよそに、周金波の作品は次第に迷いを深めていくのである[10]。

では「志願兵」はどのような構造の小説なのだろうか。語り手は、8年前に内地から台湾に戻った本島人の知識人「私」であり、一人称の小説である。この語り手「私」は台湾に戻った後、「錦を飾つた、といはれたとたんに私は赤煉瓦の床に根を下しはじめてゐたのだつた。」（15）と述べており、内地留学から台湾に戻ってから自分が台湾にあっという間になじんでしまったことに焦りを感じている人物であることがわかる。他に主要な人物として二人の青年が登場する。一人は「私」の甥で、内地留学中で一時的に台湾に帰省した大学生の張明貴である。張があと1年もしないうちに卒業する時期でありながら帰省したのは、台湾での皇民化運動推進の様子を実際に見てみたいからであった。日本に留学中であるこの張明貴は、将来的には「私」のようになるであろうことを想像させる人物である。もう一人は張明貴の友人であり、台湾で公学校を卒業しただけで内地には行ったことはないが流暢に日本語を話す高進六である。高は、ただひたすらに皇民化を目指す人物として語られており、台湾の皇民化運動を斜めから見ている張明貴に対し、高進六は皇民となるべく努力することになんら疑いを持っていない。周金波はこの作品について、「その同じ世代の二つの考へ方――その一つをひつくるめて云へば打算的な考え方であり、他の一つはもう理窟なしに、自分はも

[10] 周金波「志願兵」に関する先行研究は、張雅惠「決戦時期台湾青年的心霊図像――以周金波「志願兵」為主的討論」（『台湾人文（師大）』9号（2004）、PP.1-14）、莫素微「台湾文学中的醫療主題――周金波日文小説之考察」（『中華技術学院学報』32号（2005）、PP.157-175）、莫素微「戦争、同化與階級――[周金波著]〈志願兵〉與公民身分的追尋」『台湾文学学報』10号（2007）、PP.131-162）などがある。周金波の「水癌」および「志願兵」は皇民文学の中で論じないわけにいかない作品であり、これについてはまた機会を改めて考察したい。また周金波が迷いを深めていったという点については、拙論「周金波〈鄉愁〉論」（『台大日本語文研究』17（2009年6月）PP. 29-47）を参照されたい。

う日本人だと云ふ、この時代を代表する本島青年」[11]を描いたものだとしており、作者自身が張明貴と高進六のコントラストを鮮明にしようとしていたことがわかる。つまり、「志願兵」は、一人称の「私」という語り手によって、台湾での皇民化運動に対して対照的な張と高という二人の人物が描かれた小説だと言える。

それでは、この「志願兵」の 2 年後に発表された王昶雄の「奔流」とはどのような小説なのだろうか。

「奔流」の語り手は、医者である「私」で、やはり一人称による語りである。この語り手「私」は 10 年間日本で生活し 3 年前に台湾に戻ってきた知識人で、台湾に戻ってきた頃は「のつぴきならぬ退屈感」（104）を感じ、台湾に急速になじんでいく自分に不安や焦燥を感じている。そうした時に出会うのが伊東春生である。伊東春生は実際には台湾人でありながら、親に対してさえも台湾語を使わず日本語で押し通すほどであり、「伊東の持つてゐる人生観はひどく徹底してゐる」（107）と「私」を驚かせる。伊東の内地人としての身振りは、公学校卒業後 13 歳からの大学卒業までの内地留学で身につけたもので、内地人を必死に演じ続けている人物として語られる。この伊東と皇民化をめぐり対立しているのが、伊東の甥でもあり、また伊東の学生でもある中学 5 年生の林柏年である。林は伊東が台湾にいながら、台湾的な部分を切り捨て、ただひたすらに内地人として生きる姿に反発する。林はいまだ内地での生活の経験はなく、物語の最後では内地留学に旅立っていく。

「私」の思い入れは、作品が進むに連れて、伊東春生から林柏年少年へとシフトしていく。伊東春生と知り合った当初、「私」は、伊東が台湾にいながらも内地を彷彿とさせる生活をしていることに驚き、尊敬の念すら抱くのだが、林柏年からの話を聞いたり、伊東の立ち居振る舞いを見ているうちに、伊東に対し懐疑的になっていく。そして最終的には内地へ旅立つ林少年に希望を寄せるようになるの

[11] 長崎浩、周金波、陳火泉、神川清「徴兵制をめぐつて」『文芸台湾』7-1（1943 年 12 月 1 日）P.7。

である。

作者王昶雄はこの作品について、戦後こう述べている。

> この作品は私小説の形式を用いた。ここでは「私」（主観的）および伊東春生、林柏年（客観的）という三人の主な人物を創造した。（略）日本人を妻にめとった伊東が代表するのは、平穏を求め一心に日本人になることを夢見、事物の根源をおろそかにし、両親の生活を省みず、台湾の泥臭さを捨てようとする台湾人である。林柏年は伊東の学生であり、また甥でもある。彼が代表するのは新しい世代であり、怒っており正義感を持ち、故郷の人間の血が流れている台湾の青年である。「私」は開業の医者で、この「私」が彼ら二人の先生と学生（また叔父と甥）の間の性格や理念の相違による衝突を、一人の医者の目を通じて「私」の心のわだかまりを見つめ、被統治者の皇民化の過程における苦しみ、さまよい、あがきの一面を暴いたものである。[12]

王昶雄は、それぞれの人物について「主観的」、「客観的」な人物として設定したとしており、この作品でも二人の登場人物が対照的な位置付けによって描かれていることがわかる。

つまり周金波の「志願兵」でも王昶雄の「奔流」でも、一人称の語り手は、以前内地で過ごし台湾に戻り、次第に台湾の日常に埋もれつつ内地の文化や生活に思いを寄せ焦燥を感じている人物、そして、その語り手によって二人の対立的な人物が語られるという構造であることがわかるだろう。この二人とは、一人は内地での経験を持ちながら皇民化運動に対してなんらかの思い入れのある人物、もう一人は内地での経験を持たないながらもやはり皇民化に対して自

[12] 王昶雄「老兵過河記」『王昶雄全集』台北：台北県政府文化局、2002 年、P.41。引用者が翻訳。原文「本篇是採用私小説形式，這裡塑造了「我」（主観的）及伊東春生、林柏年（客観的）等三個重要角色。（略）娶日人為妻的伊東，他代表的是一個為求安逸，一味夢想著做日人，而數典忘祖，不顧父母死活，要把鄉土的吐臭去掉的台灣人。林柏年是伊東的學生，也是親侄。他代表的是新生代的，他是個憤怒的、有正義感的、流著故鄉人血液的台灣青年。「我」是開業醫師，這個「我」透過他們師生（又是叔侄）之間不同性格、不同理念的衝突，以一個醫生的眼光，儉省了「我」的心靈鬱結，而揭露了被統治者在皇民化過程中的苦悶、徬徨與掙扎的一面。」

分なりの考えを持つ人物であるという設定である。

以下、両作品を比較した表である。

【表】「志願兵」と「奔流」の比較

	周金波「志願兵」	王昶雄「奔流」
掲載雑誌 発表年	『文芸台湾』 1941 年 9 月	『台湾文学』 1943 年 7 月
語り手	一人称「私」 8 年前に内地留学から台湾に戻った知識人。 人物 A、B より年長。	一人称「私」(洪医師) 10 年間内地で生活し、3 年前に台湾に戻ってきた知識人。 人物 A、B より年長。
人物 A	張明貴 「私」の甥で、内地留学中。一時的に台湾に帰省した大学生。	伊東春生 公学校卒業後 13 歳からの大学卒業までの内地留学、中学校教師で、林柏年のおじ。
人物 B	高進六 内地への留学経験なし。台湾で公学校を卒業しただけだが、流暢な日本語を話す。 物語の最後で離台。	林柏年 内地への留学経験なし。伊東の甥でもあり学生でもある。中学 5 年生。 物語の最後で離台。

上の表からわかるように、周金波の「志願兵」と王昶雄の「奔流」とは、主要人物の設定が極めて似ているのである。それは、内地留学の経験を持ちながらも台湾社会に埋もれる自分を感じている一人称の語り手、その語り手によって語られる二人の対立的な人物「人物 A」と「人物 B」(もちろんその対立のありようは異なる。これについては後述する)という主要三人物から成る構造である。そして、

語り手と人物 A はいずれも内地留学の経験があり、不安定なアイデンティティを抱えているが、人物 B は内地留学がなく、皇民化運動に対しなんら疑問を持っていないという点でも同じである。

さらにストーリーでも、かなり似通っていると言ってよい。まず語り手の意識を見てみたい。周金波の「志願兵」では、語り手「私」は当初、内地の大学に留学中の張明貴に期待を寄せているが、高進六との比較や張明貴自身の言動にふれるうちに、張明貴に対する期待は薄れていく。一方、王昶雄の「奔流」でも、語り手の「私」が最初は伊東春生に内地の文化性を感じ取り好感を持っているのだが、林柏年の出現によってその好感は次第に薄れ、林柏年に自らの希望を託すようになる。語り手「私」の感情的な思い入れは、伊東春生から林柏年へと移っていくのである。

結末の類似も興味深い。両作品とも、本島でのみ生きてきた人物 B—「志願兵」の高進六、「奔流」の林柏年は、物語の最後でいずれも台湾を離れていくのである。「奔流」の林柏年は内地留学、「志願兵」の高進六は南方と行き先は違うものの、台湾に残された語り手「私」が、いずれも青年たちの旅立ちに希望や明るい未来を感じ取っている点は同じだと言ってよいだろう[13]。

以上の意味合いから、筆者はこの二つの作品の関係を「影響」や「模倣」というよりは、「パスティーシュ」であると考える。あるいは、「奔流」が「志願兵」からインスピレーションを得て創作された作品と言い換えてもよい。当然、後で発表された「奔流」が「志願兵」のパスティーシュということになる。「パスティーシュ（pastiche）」というフランス語は、辞書では「音楽・美術・文学で、先行作品の主題やスタイルを模倣・剽窃・混成などの手法によって改変してできた作品」[14]とされており、まさに「志願兵」に対する

[13] 当時、志願兵となり戦地へ赴くことは死に限りなく近づくことであった。しかし、周金波「志願兵」においては、張明貴の言葉を借り志願兵となる高進六こそ「台湾のために台湾を動かす人間だ」（21）とされており、そこに台湾の未来を託していることがわかる。

[14] 『大辞林』東京：三省堂、2010 年。

「奔流」の位置を示す言葉だと考えるからである。「志願兵」が発表されたのは 1941 年 9 月で、「奔流」はその約 2 年後に発表された作品であるが、作品構造、人物設定、モチーフ、ストーリーなど実に類似していることは上述したとおりである。こうした類似は、王昶雄が皇民化を文学作品の中に織り込む際に、周金波の「志願兵」を強く意識していたことを伺わせるのである。

三、「奔流」が目指すもの

だが、作者それぞれの作品に対する思惑も異なれば、2 年間という歳月による国際情勢の変化、日本や台湾社会の変化もあり、二作品は人物設定、構造は酷似していながらも、当然、異なる点も多い。あるいは、人物設定や構造が似ているからこそ、作者の意図の違いがより鮮明になってくると言った方が適切かもしれない。以下では、「奔流」が「志願兵」とどのように異なっているかを論じ、そこから「奔流」で描かれているものについて考察していきたい。

（一）「日本人」とは誰か

まずモチーフとなっている皇民化の扱い方が大きく異なっている点を指摘しておかなければならない。

周金波の「志願兵」においては、対立する人物 A 張明貴と人物 B 高進六との論争点は皇民化の方法論にある。張明貴はあくまで精神論として皇民化を考え、高進六は拍手（かしわで）や浴衣など形からの皇民化を実践、主張する。そこにあるのは、本島人がいかに行動すれば皇民になれるのかという方法論である。その結論として高進六は志願兵となって南方へ行くという、いわば当時の日本帝国の国策に沿った選択をすることになるのである[15]。

だが「奔流」の場合には、伊東春生と林柏年の論点は、「志願兵」のそれとは異なり、皇民化がある程度浸透した後の台湾において、

[15] 但し、だから「志願兵」が皇民文学であるという意味ではない。語り手は、南方へと向かう高進六を賞賛しつつも、自らはそこに立ちすくんでしまうのである。周金波「志願兵」についてはまた機会を改めて論じたい。

台湾人をどうとらえるべきかという点に置かれている。確認しておかなければいけないのは、この物語の主要な登場人物である三人――語り手である「私」、登場人物 A 伊東春生、登場人物 B 林柏年の三人の基本的な態度が皇民化運動そのものを否定しているわけではないという点である。この作品が発表された 1943 年は、台湾での皇民化運動が強力に展開され始めてからすでに数年が経ており、それが実際にどの程度本島人の中に浸透していたかどうかは別にして、皇民化推進の動きが日常的なものとなっていたことは確かである。「奔流」では、語り手「私」によって、内地人の身振りを身につけた登場人物 A 伊東春生はもちろん、伊東に反発している登場人物 B 林柏年も「国技剣道を我がもの」（121）にしようと励む熱心な様子が語られている。少年が「国技剣道」の日本独自の動きを学んで自分のものにしていくという過程は、まさにそのスポーツが属する文化での身体の動きを会得していくプロセスであると言ってよい。国語が精神的な血液でありその習得が日本精神の習得の第一歩であるとするなら、国技の習得は国民的身体への改造にほかならない。「奔流」の主要な三人の登場人物――「私」、伊東、林は日本の文化的精神、肉体を得ることになんら抵抗を感じておらず、実に熱心にそれを実行しているのである[16]。

その意識の根底にあるのは、「日本人」という名称の意味合いの変化である。拡大を続ける日本帝国、その一員としての「日本人」という名称は、戦争期にいたっては植民地を含む帝国内のすべての人々の総称として用いられるようになっており、従来の日本人は「内地人」、そしてそれに相対する名称として台湾人、朝鮮人、満洲人という「外地人」が存在していた[17]。だが「奔流」の場合には、日本

[16] 林柏年は運動好きの少年とされており、いろいろな運動に手を出し過激に体を使ったため、肋膜をやられて「私」の医院へとやってくる（テクスト 106 ページ参照）。林少年の体が日本的な運動である剣道によって逞しさを回復していくというのは、剣道による日本的な身体の構築の成果だと言えるだろう。

[17] 当時の台湾の皇民化運動を論じた史料を参照されたい。例えば菅野秀雄『皇民化への道』（新竹：台湾新聞社、1939 年 12 月）などでは、「本島人も等し

人、内地人、外地人の構造がそれぞれの登場人物において異なっていることに注意しなければならない。登場人物 A 伊東春生は自分の親でさえも台湾人であるがために蔑み、忌み嫌っており、伊東にとっては「日本人」という総称の中に「内地人＝上／外地人＝下」という上下関係があることは明白である。また語り手「私」も内地にいた時分には、出身を聞かれた時に「台湾」と言わず、「四国か九州」と答えた場面の内的独白から、その外地人＝台湾人であることへのコンプレックスは明らかであろう。

> （お前は何といふ卑屈な男だらう。それは明らかに台湾そのものを卑下してゐる証左ではないか。台湾人は決して中国人でもなければ、エスキモー人でもないのだぞ。それどころか、内地人生れの人々と何ら異る所があらうか。誇りをもて！同じく日本臣民といふ誇りを。）（117）

だが、本島人を内地人の下に位置付けている語り手「私」は、登場人物 B 林柏年に触れる中で、そうした位置関係を修正し、帝国人としての日本人、その帝国内の地方としての台湾人という概念へと移行していく。その移行はそれは「私」と林柏年が、剣道の大会に出場することをめぐって交わされた会話から見出すことが可能である。

> 「是非やつてくれ給へ。なあ柏年君、歴史の歩みは好むと好まざるとに拘らず、日毎に激流に向つてゐるが、本島人が立派な日本人としての本舞台へ乗り出す時期が、いよいよやつて来たんだ。だから今度の君たちの優勝には、意味が頗る深いと思ふね。」
>
> （略）
>
> 「えゝ、右ママに齧りついても。本島人も立派な日本人だ。弱虫だなどと、まるで三度飯のやうに云はれるのが堪らなくつらいんです。そ、それに本島人でゐながら、本島人をさげすむやうな奴らを叩きのめしてくれる意味に於ても、きつとやります」（120-121）

く日本人」といった言説が散見する。

林柏年少年の中には、明確に帝国に所属する人間としての「日本人」という概念があり、その中において内地人も外地人も平等であることを示している。こうした「日本人」という概念は「志願兵」の中では見られないものであり、日本帝国、日本国民といった基本的な概念において、「奔流」は「志願兵」とは異なっているのである。

さらに日本人、内地人、外地人という概念の違いが前提となることで、「奔流」という小説の真の主題がより明確となる。この小説の真の主題とは、どのように日本人になるかではなく、皇民化運動の中でどのように台湾人であるべきかという問題、つまり台湾あるいは台湾人であることをどう位置付けるべきかという問題なのである。[18]

まず登場人物 A 伊東春生は、この物語の中で最も皇民化に積極的であり内地人であるために親さえも捨てようとする人間として描かれている。しかし、「朱春生」という本島人が「伊東春生」という日本人であり続けなければならない理由として、最後の章である第 5 章では成長の過程での台湾人である両親からの重圧が語られる。それはこの物語の重要な謎解きでもある。

伊東が育ったのは、読書人気質でありながら商人への転向を余儀なくされ失敗続きの父、その父に対してヒステリーになる母からなる家庭であり、両親の衝突は最終的には伊東への重圧と成り代わっていった。その衝突の起因は父親の商売の失敗、つまり金銭的なものにあり、またその両親が伊東を内地で医学校に通わせ将来的に医者にしようとするのもまた同じ点に根を持っている。それは台湾人が「医学万能」（124）という台湾の言葉――子弟を医者にすれば経済的にも安泰であり自分が病気になった時も世話してもらえる――といったきわめて現実的な面から物事をとらえようとする点である。伊東はこうした両親に反抗する形で内地へと留学し、そして医者の

[18] 但し、筆者がここで言う台湾が帝国下の台湾、外地としての台湾であって、戦後の台湾とは異なるものであることは強調しておかなければならない。つまり、戦後王昶雄自身がこの小説について述べた言説における台湾と、この時代の台湾とはずれがあるのである。

道を拒み国文学科へと進学し、台湾で国語教師として生きる道を選ぶのである。つまり伊東が伊東であり続けなければならないのは、内地人であることにこだわるというよりも、本島人であることを徹底的に拒否した結果なのである。言い換えれば、伊東は内地人として生きるために親を捨てたのではなく、親を捨てるために内地人としての身振りを続けるようになったのである。

また一方で、登場人物 B 林柏年が伊東を批判するのも、その親、つまり台湾に対する態度においてである。林柏年が日本から「私」に送った手紙には、こう書かれている。

> しかし私は立派な日本人であればある程、立派な台湾人であらねばならないと思ひます。南方生れであるだからといつて、卑屈になることは少しもありません。こちらの生活に滲み込んで行くことが、必ずしも郷里の田舎臭さを卑下することには当らないのです。母がいかに不体裁な土着民でも、私には堪らなく恋しいのです。たとへ母が不格好のまゝこちらへやつて来られても、私は少しも気が退けることは全然ないと思ひます。母に抱かれて居れば、喜ぶことも悲しむことも、すべてが幼な児のやうに思ひのまゝですから。(127)

この部分について垂水千恵は、「『台湾人』としてのアイデンティティと『日本人』としてのアイデンティティを統合して生きることの可能性を、この柏年の言葉は示唆している」とし、王昶雄の「奔流」の中に「多文化主義」の萌芽を見出している[19]。しかし、上で述べたように林柏年の言葉の中に登場する「日本」や「台湾」といった概念をこの小説空間の中で考えてみた時、それは決して同じレベルの言葉ではない。「日本人」という帝国の枠内において、台湾人が相対するのは内地人や朝鮮人、満洲人であって、「日本／台湾」という枠組みではないのである。そこから林柏年の上の言葉を見た時、その中に見出せるのはあくまで日本という帝国の枠の中で、台湾人として台湾をどう扱うべきかという問題意識なのである。それは、

[19] 垂水千恵『台湾の日本語文学』東京：五柳書院、1995 年、P.114。

日本や台湾、中国といった国家の単位での思考ではなく、あくまで帝国の一地方としての台湾である。それを「台湾人意識」の発露と呼ぶことはできなくはないだろうが、それは戦後の台湾や日本で考えられるような「台湾人意識」ではないことはどれほど強調してもし過ぎることはないだろう。

（二）本島人青年たちの行く先

また「志願兵」と「奔流」における登場人物 B――「志願兵」の高進六と、「奔流」の林柏年――の行く先を並べてみれば、「奔流」が目指したものがより明確になるだろう。「志願兵」の高進六は志願兵となって南方へと旅立っていくのだが、「奔流」の林柏年が向かう先は内地なのである。そしてそれはまた「奔流」というタイトルが意味する方向を示すものでもある。「私」は林柏年の剣道の練習を見に行った際に語る言葉――「なあ柏年君、歴史の歩みは好むと好まざるとに拘らず、日毎に激流に向つてゐるが、本島人が立派な日本人としての本舞台へ乗り出す時期が、いよいよやつて来たんだ。」（120）、そして林柏年が向かった先から考えれば、タイトルの「奔流」が意味することが、まさに本島人が内地へと流れ込んでいくことは明らかであろう。「志願兵」では、高進六が帝国の求めに応じて身を犠牲にし南方で戦闘に参加することを考えていたのに対し、「奔流」では林柏年は高進六とは逆方向の内地へ向かっていく。林柏年が内地へ乗り込むのは、立派な台湾人として（そして同時に立派な日本人として）内地人と比肩するためなのである。

さらに両作品の終わり方も、似ていながら、対照的なものになっている点に注目したい。周金波の「志願兵」では、高進六の南方行きを知った語り手「私」と張明貴が 2 階へ上がっていく場面で終わる。

> 狭い階段では二人並んで歩けないので私は彼の後から登つていつた。彼は背が高い。遮ぎられて暗いので私は明るみを拾ひながら一段一段と数えるやうに登つた。
>
> かうしてゆつくり登つてゐると階段もなかなか遠いのだ。（21）

「志願兵」の場合、語り手「私」の足取りはまるで老人のように重く、日本人たるべき究極の選択——南方行きへの決意が語り手「私」にとってはまだ難しく遠いものであることを示している。一方、王昶雄の「奔流」のラストシーンは、「私」が丘の上から伊東春生の姿を見下ろしながら、その心情が語られる。「私」は、台湾人でありながら学生たちを「純日本的」な人間に教育しなければならない立場にある伊東に同情し、「泣きたい気持で一ぱい」(129)になってしまう。

> 私はたまりかねて、クソ、クソと連呼しながら、丘の上から丘の下へと駆け下りて行つた。そして子供のやうに走つた。躓けば走り、躓けば走り、風の稜にあたれば更に走りつゞけた。(129)

両作品のラストシーンとも、移動する語り手の場面で終わる。しかし「奔流」の場合、「私」は伊東を見下ろし、伊東の哀しみ、つらさを実感して「子供のやうに」走って丘を駆け下りる。それは、下から高進六を見上げ、2 階へ上がる「志願兵」の語り手とはまさに逆のあり方だと言ってよい。

つまり王昶雄の「奔流」は、人物設定、ストーリーなど構造的に周金波の「志願兵」と酷似していながら、帝国が拡大を目指す方向である南方とは逆の方向——内地——を主人公たちが目指す物語なのである。

四、おわりに

「奔流」は、「志願兵」から 2 年後に書かれ、しかも「志願兵」の掲載誌『文芸台湾』と敵対関係にあった文芸雑誌『台湾文学』に掲載された作品であった。皇民化運動が帝国の方針として強力に推し進められ、台湾内部への締め付けが厳しくなる中、皇民化や台湾人アイデンティティを扱うことそのものがすでに危険性を孕むものであった。だが、そうした中で、作品で皇民化を真正面から扱った「奔流」は、それだけで当時は一種の衝撃を持って受け入れられたに違

いない。

これまで述べてきたように、「奔流」の登場人物たちが考えるのは、日本帝国の中でどう台湾人であるべきかという問題であり、それは周金波の「志願兵」が「台湾人である我々がどのように日本人であるべきか」というテーマとは、写真のポジとネガのような関係にある。そしてまた、主人公たちが向かうべき方向も、この二つの作品は逆方向を向いている。筆者が「奔流」を「志願兵」のパスティーシュだとする理由はここにある。

だが、「奔流」の登場人物 B 林柏年が内地へ乗り込む行動をどう読むべきかはまた別の問題である。確かに、帝国（植民地を含む）全体が南方へと向かう中、内地へと乗り込み内地人と渡り合おうという林柏年少年の気概に、後付け的に「抗日精神」を読み込むことは難しくはないだろう。そしてまたそれは、戦後に発表された作者王昶雄の言葉とも合致している。しかし果たして 1943 年の台湾という時空において、日本語を解する当時の読者がどの程度までこの作品の中に帝国に抗う意味合いを読み取っていたのだろうか。これは、現代からは計りかねる問題なのである。

参考文献（年代順）

著作

菅野秀雄（1939）『皇民化への道』台湾新聞社

鍾肇政、葉石涛編（1979）『光復前台湾文学全集』遠景出版

垂水千恵（1995）『台湾の日本語文学』五柳書院

中島利郎・黄英哲編（1998）『周金波日本語作品集』緑蔭書房

長谷川泉・高橋新太郎編（1971）『文学用語の基礎知識』至文堂、1971 年 4 月

賴婉玲（2007）『皇民文学論争研究』国立中央大学中国文学研究所修士論文

王景苡（2009）『書写「精神血液」——皇民化時期台湾小説的「民族」再現』国立中興大学台湾文学研究所修士論文

論文

張恆豪（1989）「三読「奔流」」『文訊雑誌』40、PP.109-111

呂興昌（1991）「文章千古事、得失寸心知－評王昶雄〈奔流〉的校訂本」『国文天地』7-5、P.18

王昶雄（2002）「老兵過河記」『王昶雄全集』台北県政府文化局、PP.37-48

尹東燦（2003）「王昶雄「奔流」論」『藝文攷』8 号、PP.19-44

張雅惠（2004）「決戦時期台湾青年的心霊図像——以周金波「志願兵」為主的討論」『台湾人文（師大）』9 号、PP.1-14

傅錫壬（2005）「從「奔流」的命題探索両種文化的衝撃」『淡江史学』PP.199-211

莫素微（2005）「台湾文学中的醫療主題——周金波日文小説之考察」『中華技術学院学報』32 号、PP.157-175

莫素微（2007）「戦争、同化與階級——[周金波著]〈志願兵〉與公民身分的追尋」『台湾文学学報』10 号、PP.131-162

横路啓子（2009）「周金波〈郷愁〉論」『台大日本語文研究』17、PP.29-47